

An Ultimate Japanese Style Cue

ILC

新しいカタチのジャパニーズカスタム
【後編】

ILC、和の カスタムキュー

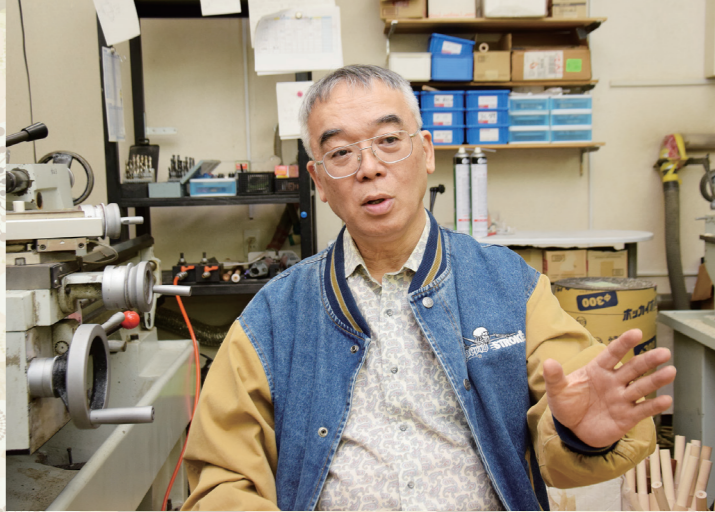
家族経営の同じ工房で製作される国産キュー、
9Hearts(ナインハーツ)とILC(アイエルシー)。

両ブランドの違いは、何だろうか？

共通する「日本製」への強いこだわりと、
異なるコンセプトで製作されるキューの魅力を2回に渡って探るレポート。

後編はLuckyこと菱沼巖氏が手掛ける
受注生産の超高級カスタムILCを紹介！

取材・文/K.Kagomiya



「和や禅の心を勉強中です」と語る菱沼。Eは日本の美をモチーフにしたデザインを多く手掛ける

年産6〜8本のレアメーカー

「ILC」。この一風変わった名称は菱沼のキュートブランド。菱沼浩之・渡辺貴史の2人が製作する『OnHearts』とは、ジョイント構造やシャフト材、デザインが異なり、キュー製作の基本理念や、新潟市の工房で製作されていることを除けば、ILCや9Heartsは別物だ。

年間生産本数は、わずか6本から8本。現状、少量の在庫はあるものの原則受注生産で、納期は2年から3年と、プレイヤー所有の実物を見ることも困難な、超高級カスタムである。

カスタムキューの歴史そのもの

ILCを理解するためには、まずキューメーカー自身、菱沼のフロアビルから知らなければならぬ。昭和29年(1954年)生まれの65歳、菱沼の歴史は、そのまま日本におけるカスタムキューコレクションの歴史でもあるからだ。これまで、ピリヤード場オーナー、プロプレイヤー(JPB A 25期、現在退会)、キューディーラー、質・量ともに世界トップレベルのコレクターと、あらゆる形でキューに関わっている。

その原点は、菱沼が宮城県仙台市で経営していたピリヤード場『パワーハウス』。「80年代半ば、店のお客向けに、マクダモット、マリ、ヒューブラー、ジョスなどのキューをアメリカから輸入していました」

菱沼がコレクターとなるきっかけは、希少な「ガス・ザンボッティ」。そのいきさつは『ワールド・ピリヤード・マガジン』92年12月号掲載の記事で菱沼自身が語っている。

「ほしかったのは、たった1本のガス・ザンボッティ。それがすんなりと手に入ったら、コレクターまでにはならなかったかもしれない」ところが、手に入れようにも、誰に

旅の、思わぬ予定変更からだった。フロリダ州在住のボブ・マンジノとの面会が急遽キャンセルとなり、代わりに向かったのが、同じフロリダのジョン・シヨーマン。彼との雑談中に「あるキューメーカーが、ストックした古い木材を売ったがっている」と話題になり、会いに行くことになったのだ。その名はエープ・リッチ(Abe Rich)。ニューヨーク州フリーポートにかつて存在した親族経営のキューメーカー、リッチ・キューで経験を積んだ後フロリダ州マイアミに移住、73年に「スター・キュー・マニユファクチュアリング」をたつた1人で立ち上げ製作していた、80歳代半ばのメーカーだ。菱沼は、当初「買いつけてキューメーカーに渡し、キューやシャフトをオーダーしよう」程度に考えていたという。



▲9Heartsのスリークッション用キュー開発にも力を注ぐ



▲ILCの持ち味、日本的で美しく繊細なインレイ

菱沼が訪れると、雑然とした工房内に積み上げられた木材は、確実に数年間はストックされていたと思いきものばかり。中でも、見たこともない暗褐色のメイプル材を見つけ、コンクリートの床に打ち付けた時の、甲高く乾いた音が強く印象に残った。ところがエープ・リッチに話し掛けても「お前にこの木材の値打ちがわかるのか?」と、まるで禅問答のような問い掛けばかり。どう答えても「キューメーカーでないヤツに価値がわかる訳がない」と拒絶される。日本に戻る飛行機内で菱沼は「あのメイプルを使うと、どんなキューができるのだろう」という考えが頭を離れなかったという。

菱沼は2週間後の08年7月に再び訪問するも、エープ・リッチから同じ質問を繰り返されて追いつかれ、断念。

An Ultimate Japanese Style Cue



▲菱沼はメーカーとの交流も深い。左からB・ザンボッティ、E・ギュテレス(ジナキュー)、J・ステータム(サムサラ)。

聞いても無理と言われ、改善の策として他のカスタムキューメーカーの作品を次々と手に入れるようになり、コレクションが形成された。

興味深いのは、キューコレクター究極の夢を聞かれた菱沼が、すでにキュー製作を目標として語っていることだ。「いずれキュー作りができたらなあ、と思っています。(中略)1本でもいいから自分のキューを作ってみたい」(同記事)

ちなみに菱沼の愛称、「Lucky」(ラッキー)は、90年代初め、親交が深かったルイジアナ州のキューメーカー、ビル・シツクから名付けられたものだ。「集めた数多くのキューが全て良いものだったこと、それらのキューから数多くの知識や情報を得られたことに対して『お前』というラッキーだ」と言われたのが由来です」

ところが、08年11月にエープ・リッチが亡くなり、遺族から全てを売却したいとの意向が突然伝えられた。そこで菱沼は09年1月、アリゾナ州フェニックス在住のキューメーカー、デーブ・バレンブルーギーを伴い、数日間かけて工房内を整理し、バレンブルーギーの自宅そばに倉庫を借りて木材を運び込んだ。

菱沼は親しいキューメーカー達に打診したが、「古い木材はいらない」とのつれない返事ばかり。膨大な量の木材をアリゾナに抱え込む状況に陥った。その時耳に残っていたのが、エープ・リッチの「キューメーカーでない人間には価値がわかる訳がない」という言葉。「ならばキューメーカーとなって、この木材を生かそう」と決心した。

それからの数年間、菱沼はキューメーカーになるため苦難の道を歩む。デーブ・バレンブルーギーの自宅に数カ月間居候して、倉庫で木材を整理しつつ、キュー製作の基礎を学び、製作に取り組んだ。さらに、クラシカルかつ繊細なデザインで人気が高いキューメーカー、デニス・スィアリングの工房にも通い、彼が持つ高いインレイ技術のノウハウを吸収した。

帰国後は仙台市で工房を構えるも、周囲からは「本当にキューが作れるの



▲独自の技法を研究し、海外メーカーとは一線を画す日本の、かつ空間を生かした繊細なインレイがILCの持ち味。

そして00年、キューディーラー『アイ・ラブ・キューズ』を開業。このシヨップ名の頭文字『ILC』が、キューブランドともなったのだ。六本木と横浜でシヨップを経営したり、キューメーカーをアメリカから招いて展示販売会を開催したりと、積極的に活動したのもこの時期。コグノセンチ、デーブ・バレンブルーギー、ジョン・シヨーマン、ボブ・マンジノ、ティム・スクラガス、ジナキュー、ブラックボア、タッド、ザンボッティ、サウスウエストなどの少量生産メーカー、さらに先角一体型タツプの元祖、スレッジハンマーなど、誰でも一度は憧れるキューを数多く扱った。

偶然と必然でキューメーカーへ

その菱沼がメーカーとなるきっかけは、米国旅行。キューメーカーと会う

か」と疑いの眼差しを向けられていたという。しかし、ジナキューのアーニー・ギュテレスからは「自分に一番似ているのがお前だ。続ければ必ずできる」と励まされ、12年12月、ILCとして最初の1本ができた。「塗装が気に入らず、1年掛けて何度もやり直しました」。その背景には2人の息子同様、仙台市から新潟市に家族そろって移住したことで、肚を括ってキュー製作に注力するようになった点も大きいだろう。

半世紀以上前のメイプル材

ILCは、エープ・リッチのメイプル材を使ったシャフトが標準。おそらく50年代に製材され、半世紀以上寝かされてきたものだ。「さまざまサイズメイプル材をおよそ6000本購入しました」。

そのメイプル材を使ったシャフトは、しなりが少なく戻りが速いのが特徴だという。筆者は13年製のILCを数週間借りる機会を得た。プロプレイヤーの経験も持つ、菱沼自身による手入れが行き届いたキューは、現代のハイテクシャフトにはない、撞いた際のソリッド感、適度なしなりと心地良い音を持つていた。またILCの特性は、海外トップレベルプレイヤー達から高評価を

受けている。台湾の強豪、張栄麟と謝佳臻、アメリカのベテラン、ラドニー・モリスが、ECCで優勝タイトルを手に入れていることが、そのハイパフォーマンスの証明と言えるだろう。

菱沼はジナキューからも荒削り済みシャフト材を購入しており、エクストラシャフトとして注文し、撞き分けてみるのも面白い。

和テイストのデザイン哲学

ECCの大きな特徴はデザイン。アメリカン・キューメーカーとは趣を異にする、より微細なインレイワークがポイントだ。「4面同じデザインも良いですが、空間美を表現するというか、キューを回転しても成立する、連続し

て永遠に続くデザインが好きですね」

菱沼は、動植物をモチーフにした「和テイストのデザインを、アメリカのメーカーとは異なる、日本の職人的な細やかさで施す。「自分の中では、新しいものを作っている一方、古いものを追いかけている感覚が常にあります」

またオーダーキューにおけるデザインアプローチは、菱沼の個性が色濃く反映される。「注文主の期待を超えるデザインを目指しています。作りたいものは、注文主がほしいものではないのです」

誤解のないように補足すれば、納品の際、注文主が驚くようなキューを作りたいという、菱沼の強い意思がデザ

インに強く反映されるということだ。

本当のデザインはキュー構造

しかし菱沼は、「デザインで一番大切なものは、表面的なものではなく構造的なもの」と言い切る。「いろいろなキューメーカーの良い点、悪い点を見極め、ミックスして作っています」。それは、様々な製法を比較してベストと考える手法を選んでいるということだ。

それは材料だけでなく、塗料や接着剤、工作機械からサンドペーパーに至るまでの道具選びにまで及んでいる。数多くのキューメーカーの作品に触れ、工房を訪



れて実際の製作現場をつぶさに観察してきた経験が一番生きている面だ。

令和を生きるカスタムキュー

16年のカーボンシャフト登場以来、キューの特性は木製シャフトからカーボン製シャフトを基準に語られる時代が近付いてきた。安定性、均一性、パフォーマンスの面で、次々と開発されるカーボン素材、または非木材のシャフトがメイプルシャフトを上回る日もいつか来るだろう。しかし菱沼が作るECCは、その流れとは競わず、撞き味を楽しみ、キューのパフォーマンスを引き出すのはプレイヤー次第という考えなのだろう。

「昔のバラブシユカやカーセンプロックが持つ、現代では忘れられている打感を、古いメイプル材を使って再現できることで、自分は恵まれていると思います」

ビリヤードがスピードや飛距離を競う競技にならない限り、カスタムキューは令和の時代になっても残ってゆくだろう。菱沼がエーブ・リッチの年齢に達するまで、あと20年はある。今後ECCがどのように進化するのか、楽しみだ。自分だけの、長く付き合える一本を探しているなら、オーダーから完成までの時間も長く感じないだろう。